

豫園棒石



写真上：同志社チャペル南東にある「豫園棒石」群
写真右：風化の結果、独特の形状を表現する石



創立者新島が使用した「岩石ハンマー」は角が欠けている。岩石や鉱物への相当な好奇心と探究への情熱がないとここまで欠けない。

アーモスト大学在学2年目の1868年6月、新島がハーデー夫人に送った手紙の一節には、鉱物採集への思いが綴られていておもしろい。

「最近鉱物の採集を始めました。鉱物に関しては何かを知っておく値打があると考えるからです。日本にいた頃、私はあの国は農業国だと考えていました。でも、今では日本は鉱物の国だと思います。日本には金、銀、銅、鉄、（最近発見された）白金、その他沢山の貴金属を産出するいくつかの鉱山があります。」
日本人初の「理学士」の学位を与えられたアーモスト大学時

代、新島は理学の中でも地質学に興味を示した。

「勉学の関心はやはり自然科学が中心である。とりわけ地質学を好み、夏休みにはハンマー片手に鉱物・化石採集に出かけたこともある。五週間以上にわたって歩いた距離はなんと四百マイルを超えた。」（「新島襄と建学精神」本井康博）

長期休暇を利用した徒歩旅行が好きだった新島は、各所でハンマーを使用して、熱心に岩石・鉱物を採集したに違いない。その際に収集した岩石の一部が、新島旧邸の戸棚に保存してあるものであろう。

さて、同志社チャペル南東に風変りな石組がある（写真）。この石組は、2000年3月当時、この地にあつた同志社中学校の保護者の方が「本物に触れ好奇心をかき立て、探究心を育てていただいた同志社教育へ感謝したい」（デザインメッセージ「羽ばたく子どもたちの未来よ輝け！」）と設置されたものである。この石は古くから中国蘇州の豫園に伝わる景石のひとつで、「豫園（Yuan）棒石」とこう。日本では産しない珍しい岩石である。蘇州周辺で採石される有名な「太湖石」とは岩相が明らかに異なり、白い斑模様や凹凸に富む独特の外観を示している。

この石は、「含石灰岩礫泥岩」という、分類上は「堆積岩」の一種であるが、その形成過程が興味深い。

今から2億9千万年前〜2億8百万年前の古生代ペルム紀〜中生代三畳紀の頃、浅く暖かい海が広がった「礁」の場所で未固結状態の石灰質堆積物が堆積していた。その場で発生した地殻変動や重力地すべりの影響でこれらの堆積物が斜面を流れ下り、海底で堆積していた未固結の泥質堆積物に入り込んだ。流れ下る過程では、未固結の石灰質堆積物が細切れにちぎれ、泥質物に塊状にとり込まれた（こうしてできた礫状物を「偽礫」と言う）。

この偽礫の部分が石灰質のため、長年の雨水等で溶け陥没する。その結果、基質だった泥質岩が独特の造形美を表現することとなった（写真右下）。

新島は、脱国のち上海でテイラー船長のワイルド・ローバー号に乗り込んだ。新島にとつては特別な意味をもつ「上海」近くを起源とする石の庭を、今どのような思いで眺めておられるのだろうか。

（中学校・高等学校教諭 田邊利幸^{たなべのりゆき}）